

清記用紙(番号)

(桃) 写

10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
		竿の音ときどき拾ふ花野かな	オウゴンシヨンの古伊万里で利く新酒哉		秋天の臍へ紙飛行機刺さる	利酒の大会委員下戸の集		虫の音や新酒新米新秋刀魚	

10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
豊年 の大地 の中 の道 一本	蜘蛛 の国 に光 る銀 粒今 朝の 秋		秋の 酒ま こと しや かな 噫に 酔ふ		格子 戸に 新酒 あり □に 一歩 入る	ます	月の 剣ア ニパ ンマ ンの 慈心 愛か な	つるぎ	刃田 守宅 や盗 人サ 秋の 横行 す

10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
ただ海を見ているだけの夏帽子	鈴虫が鈴虫を食ふ夜の怪	松茸の家苞うれし卓囲む	いんづと	夕日浴び金 こん 色 いろ 深む稻穂並	金の翅 はね 思い思いに秋茜 あきま		再会に交はす新酒や可惜夜に	あたりよ	顔見せぬ女踊りや風の盆

10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
				依 び 入 り の 手 は 奔 放 に 阿 波 踊	秋 う れ し ハ ン ド バ ベ ト の マ リ 穀 士	ア ン ス の 塩 を 一 紙 の 新 瀬 が な	盃 交 わ り 光 を す く ハ 新 瀬 が な	杉 玉 の 色 を 穴 規 で 新 瀬 待 つ	女 小 畑 で 唄 み た る 新 奈 風 靖 一

10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
				土あれば虫の声あり眠る路地	葉尽くしの空から注ぐつくつくし	爽涼や勝ちなき一生ハルウララ	サ繢蓄を語る上司の新走	小泉の新米銘柄「セ光リ」	雄弁に秋の夕日は沈みけり

清記用紙(番号 6)

(福田洗弥) 写

10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
				切り子猪 ちこ 日透 す かし新酒の飲みくらへ	子も孫も居らぬ昼餉や敬老日	父在 ま まばさしで飲みたき新走り	秋高し熊のブーサン街へ出る	秋蝶や神の元なる城跡へ	懐 ふところ に狐の剃刀 かみばり 門出かな

10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
		後 ^{のち} 添 ^{とま} を拵 ^{もち} ためつめづれ秋彼岸	新走酒造り唄丹波流		鑑 ^{かん} める四月の坂の途上かな	天窓に透けて晩夏といふ晴間		一旋回くてより秋の蝶となる	鶴橋の堰牛タンに梅 ^{うめ} 棧 ^{かん} をぎゆ

清記用紙(番号 8)

(山崎 たか) 写

10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
低頭 ひだう に幣 ぬき の清 きよ らを受けて秋	ほづ下戸も、今宵だけはと新酒吸む (まよ)			秋めくや屈託 くつとく のない山羊の鬚 ひげ	いつまでも若くあれよと新酒吸む			お抹茶をすすすと吸ひ上げ秋暑し	駄弁の短き暑や今年酒

清記用紙(番号 9)

(近藤和卓) 写

1	秋はじめ恋の魔法が解けたとき、
2	剣を抜き花を落とすか秋葵 ^{オクラ} の実
3	茗々し古希を祝つて今年酒
4	秋 ^{あき} 湿 ^{しめ} り甘き匂いの図工室
5	抜け殻のヤンマヤマトを越えるるか
6	匂のごとく舌に転がし今年酒
7	株価ゆれにゆれる夜長かな
8	
9	
10	

清記用紙(番号 10)

(関 洋子) 写

1	六甲をそびらに万博秋夕焼
2	十ひがき げん 盃を下戸も差し出す新酒かな
3	秋日の風と葉音の混じる道
4	秘め事を「 ^ひ づくり」 ^あ 各々込む新走
5	
6	
7	
8	力 ^あ 尽く秋を招ひる昔 ^{つる} 又返 ^{かへ} し
9	
10	あらばしり母のかかりし羽織かな

1	贈られし新酒のラベル「古古古米」
2	愛しさは時の流れに揚げ花火
3	瀬戸内の塩をひとふり新豆腐
4	目に口にかうまうてゆく今年酒
5	出雲琴かかえ始まる秋の祭
6	新涼や湯上がりの髪ほのかな香
7	
8	
9	
10	

清記用紙(番号12)

(服部梅句) 写

1	度先にひそかに突る 葡萄 ^{ぶどう} かな
2	枝豆 ^{えだまめ} や三粒 ^{さんりゅう} 莢 ^か をお供 ^{とも} えに
3	
4	今宵また話あれこれ 今作酒
5	表彰 ^{しょうしょう} に縁なく生きて法師蟬
6	
7	金印 ^{きんいん} の倭 ^や の字まばゆし新酒汲む
8	矛盾 ^{まひん} 術と記す看板青嵐
9	
10	

清記用紙(番号13)

(山下疾風) 写

10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
アクセルを踏み込み合流天高し		どや顔の秋刀魚の腹を摘み上げ		荒走り肴は土佐の一夜干し	始まらぬ恋を了はらせ夜の桃		配る千ラシ貰ってあげて秋はじめ		万博の行けずに秋となりけり

10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
			役目終え尚も律儀に立つ案山子	枝豆やテレビの前に殻の山	秋の田の稔りを待ちぬ 黄 ^キ 爛 ^{ラン} 々 ^{ちゃん}		星月夜ゴッホの渦を探しをり	「国宝」のロケ地巡礼 秋うらら	お供えは少し辛口あらばしり

10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
	銘のあるぐい呑みにかへ新酒干す	ほ	母と娘のフェイスタイムの夜長かな	利酒や青き蛇の目の二重丸		肩並べ不登校思も夜学子も	大将のこだわり並ぶ新酒かな	ふるさとは母屋と納屋と葉鶏頭	

清記用紙(番号16)

あてうちめ

長陽
(写)

10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
新走杜氏の気魄も育みて	きこはく	今日もまた予後の散歩や秋時雨		かなかなに暮れゆく九重坊々鶴		名残り蟬さまたまな名残り日の名残り		白の花盃ニつ今年酒	亡き母の書架に残せし拾団扇

10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
		ちぬの海たゆたふ浪に暮れる秋	夕刊に昼間の余熱秋暑し	大空や胸一杯に稻がほる	鈴虫や母の無い子ゝ子守唄	秋の聲忍びやかなり闇孤	おき	樹陰といふ二十九画乱れ秋	うっ

1	染まりゆく生駒連山秋の暮
2	嵯峨野までお供しませう盃の月
3	
4	新酒酌む背筋正して一口目
5	桃山の金継ぎ盃に注ぐ新酒
6	
7	妻貝舞ふ日々の残暑の弛む無し
8	盃と盃目と目で交わす新酒かな
9	
10	

10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
				かなかなや木立に高き闇ありて	帰りゆくゴジラの尻尾秋初め	顔見えぬ女踊りや阿波の夜	石ころの静かに眠る律の調べ	梅雨の街行き行き行けど梅雨の街	余生かな昭和天皇忘れぬ雪